

---

BACK

松本 和

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

BACK

### 【Nコード】

N2520B

### 【作者名】

松本 和

### 【あらすじ】

酸性雨が降り続ける乱れた世界。俺には行かなくてはならないところがある。でも俺はまだここを動けずにいる。

## ブローグ

ロアと会ったのは、ほんの一週間前だ。ロアは酸性雨が降る中、身を守るものを何も身に付けていなかった俺を自分の家に来るようにと促た。

…出会ったときにはもう感じていたさ。ロアは俺たちとは何かが違ってるってこと。

ロアは俺を家に連れてきてまず最初に「シャワーでも浴びてきなよ。」と言った。

俺は言われた通りにシャワーを浴びることにした。シャワーを浴びながら考えた。何であの人は俺を助けてくれたんだろ。俺はもう二週間もの間、住むところを探して彷徨っていた。その間何人もの人に会ったが誰一人俺に話し掛ける人はいなかった。

どうせ死ぬからだ。酸性雨の降る中何も身を守るものを身に付けずにいるなんて、尋常じゃないからだ。…なのになんであの人は…いくら考えたところで俺が本当の理由を見つけることは出来ないんだろ。そう思ったから考えるのをやめた。

俺は水の使いすぎは悪いと思い早々にシャワーを止めてお風呂場から出た。

「着替えだけ…」

ロアは声もかけずに脱衣所…らしきところに入ってきた。そりゃお前の家だし俺は男だけさあ!?

とつさに体を拭いていたタオルで体を覆い、しゃがみこんだ俺をロアは驚いた目で見ていた。

「…悪かった。次からは声をかけるよ。」

ほほ笑みながら言われた言葉も、その顔も作り物のようだった。鳥肌がたった。「いや…俺こそ悪かったよ。…着替え、貸してくれるなら…貸してほしいな。」

鳥肌がたったまま言ったその言葉は自分でもはつきりとわかるほどに震えていて…そんな俺をロアがどう思ったのかはわからない。

ロアの服を着て台所…らしきところに行った。ロアは暖かいココアをいれてくれていた。

…この家は不思議だ。…というか変だ。どこかしこも本だらけで、自分がいる場所が台所なのかさえわからないくらいに本にうめつくされている。

置いてある本がどういう本なのか題名を見ようとしたところへ、ロアが湯気をたてるココア持ってきて俺の前に置いた。

そして俺に椅子を差し出し座るように言った。自分は積み重ねた本の上に座った。

「ありがと。」

さっきのことであつて、俺は正直早くロアの家を出ていきたいと思っていた。

ロアはまるで自分のことを警戒している猫にでも言うように言った。

「さっきも言ったけど…ずっとこの家に居てもいいんだよ。」

…わけわかんないよ。俺は赤の他人だぜ？今の時代…親が生き残るために自分の子供を殺すような、こんな時代に…誰だつて自分が生き残ることで精一杯なこの時代に…一体何なんだよ。

「僕は一人暮らしだから誰か一緒に住む人探してたんだ。」

それが本心なのかは疑わしかった。だいたいロアくらいの若い年で一人で暮らしてられるっていうのがすでに普通じゃないんだよ！

俺はロアが納得のいくような言葉をゆっくりと選びながら答えた。

「……俺は、行くべきところがあるから…感謝はしてるよ。…でも、すぐにまた行かなくちゃいけない。」

ロアはしばらく黙ったままだった。俺はすぐにこの家を出て行けると安堵した。

でも、ロアがそんなに簡単に俺を帰すはずがなかったんだ。

「そっか…。でも…とりあえず、今日はここで休んでいくといいよ。寝るところもあるし。」

ロアの笑顔を見て、また鳥肌がたった。断り切ることが出来ずに、俺は嫌々ロアの家泊まることになった。

それから一週間、俺はロアの家から出させてもらっていない。

ロアは俺たちとは何かが違うんだ。…俺はそんなロアが怖い。一週間たった今でもロアとは打ち解けられずにいる。

## 第1話

俺がロアの家に来てから一週間。一週間一緒にいてロアについてわかったこと。

まず、ロアと俺は同じ年で17歳だ。ロアは家族はもちろんのこと親戚もいない。俺と一緒に。

それから、ロアは家から歩いて5分くらいのところにある飲み屋を経営している。一人で。といっても今は俺も一緒。

酸性雨がいつも降っていて空だっけいつも淀んでいる……それが今の俺たちのすんでいる環境だ。草や花や木もめったに見られないし、上手に育てないと家畜もすぐに死んでしまう。

そんな秩序が悪い環境だから、犯罪なんて日常茶飯事だ。自分の身は自分で守らなければ生きていけない。

ロアの飲み屋はそんな中でも繁盛している。理由はよくわからないけど。だからロアは一人で暮らしていられるんだ。

普通の俺たちくらいのガキが一人で暮らしていたらすぐに餓死でしんでいるさ。犯罪に手をだすってんなら話は別だけどさ。

ロアは人を引き付ける何かをもっているんだ。俺にはそれが恐くてならないけど。

目が笑っていないほほ笑みや有無を言わせない問い掛け方は誰にも負けないだろう。……強引なんだ。自分勝手とはちょっと違うかな。

一週間一緒にいてわかったことなんて本当に少ない。まだまだわか

らないことだらけだ。それに俺はまだロアへの警戒心をといていない。それはロアもわかっている。

それでもロアは俺に話しかけてくるし、何度家を出ていくと言っても了承してくれない。

一回夜逃げようとしたけど、あっさりと捕まった。ロアは只者じゃない。冗談じゃなくて、普通の人……俺たちとはどこかが違う。

俺が最初にしたものは確信に変わっていた。

家で夕飯を食べているときに、もう何度もした質問をした。

「もうそろそろ行きたいんだけど、いいよな。」何がいいのかわからなくてロアにはわかってる。

「外に出れば君は死んじやうよ。」いつものロアの答えだ。でも、ここで諦めたらもう二度とここを出れないじゃないか。

「それでも俺には行かなくちゃいけないところがあるんだよ！」俺はロアの目を見ながら言った。

「その行きたいとこってどこなんだよ。この町から隣の町までは歩いて丸7日はかかる。その間とまれる宿なんて一つもないんだよ。」

「死んじやうよ。」

ロアの意見は最もだった。

それでも俺は早く行かなくちゃいけないんだ。

「俺はここにくるまで2週間歩き続けたんだ。大丈夫さ。」それを聞いてロアは少しの間考え込んでいた。

しばらくして、ロアは落ち着いた様子で俺に話した。

「あつちから来たから…僕の記憶が正しければ君はエルタ村から来たんだろう。」

「そうだけど……それがなんだよ。」俺は下を向きながら答えた。次にロアがなんていうかが恐かった。

俺のその言葉を聞いて、ロアは大きくため息をついた。そしてさらにと言った。「それならなおさら行かせられないよ。……一生ここからは出せない。」

思わず顔をあげたら、ロアと目があつた。まるで獣に見つめられているようで居心地が悪い。

「だから！…なんでだよ。」もう俺の負けだつてわかっていてもそう言っしかなかった。やるせない。



## 第2話

「君：ひどい怪我をしているでしょう。…はじめて会ったときから気づいていたけど。」

話してくれないし、秘密にしておきたかったんだと思って。」

確かに俺はロアに怪我をしていることを言っていない。…：じゃあなんで知ってんだ！？初めて会ったときには気付いてたって：俺は怪我してるとこは全部服で覆っておいたのに。

何がなんだかわかんなくて、冷や汗がとぎれることなく体中からあふれてくる。

「だから、怪我なんてしてるのに酸性雨の中歩いちゃダメだよ。…この前もアレが君の限界だったでしょ。」

すべて見透かされている。ロアには隠し事なんてできないんだ。…：恐い。ロアは俺のことをどこまで知っているんだ？さっきは俺の住んでいた村をあてた。…もしかして、コイツ！

「確実に死ぬのに：君は行くの？怪我は悪化して、化膿して、空腹に耐えて、必死に歩き続けて。」

次の言葉を聞くのが恐い。コイツは知っているんだ！俺は思わず両耳をふさいでうつむいた。聞きたくなかった。

「そこまでする価値があるのかい？…：君の村の人々は…。」ロアの顔は見えない。…でも笑っている気がする。

やっぱり知っていた。わからせるような仕草をしたつもりはない。  
なんだコイツは。

「ねえ。聞いてる？」

ロアが俺の肩に手を置いた。驚くほどに冷たい手だった。ふいにロアの手を払い除けた。

触れられるのさえイヤだと感じた。

「うるせえよ。…お前に関係、ねえつつうの。」

俺が必死に言ったことでさえ、ロアにとってどうでもいいことなんだ。

「関係あるよ。一緒に住んでるじゃないか。」今度はロアの顔が見えていた。確かに、“笑っていた”。

「強制じゃん。」やさぐれていると言っている俺の言葉を聞いて、ロアは再びため息をついた。

そして俺から少し離れると面白がりながら言った。

「じゃあ、君がなんで死ぬ思いをしてまでここに来たのかをもっと詳しく教えてよ。」

さっき僕が言ったことなんて全部勘なんだからね。」

ウソツケ。俺は心の中で呟いた。ついでに、現実ではけなせない分、心の中でおもいつきりけなしてやった！

と…それどころじゃない！条件もなく自分の…自分の村の秘密を

話すなんて絶対にゴメンだ！

「話したら、行かせてくれるのか？」とロアに聞いてみた。

「……まあね。」至極曖昧な返答だ。しかし話さなかったらこのまま何にも変わらない。それなら話す他に道はないさ。

俺は覚悟をきめた。

### 第3話

「ロアの言うとおり、俺はエルタ村から来たんだ。

お前がいつのエルタ村を知っているのか知らないが……今エルタ村は村全体がはやり病にやられてるんだよ。

村のほとんどの奴がな。んで、その病気に効く薬がエルタ村にはないんだ。

どこにあるか…これはたぶんの話だけど、ここの隣村のアルス村にあるって聞いている。

さつきもいったけど、村のほとんどの奴が病気にかかってるから薬をとりに行く奴も限られてたんだよな。

そこでだ。若いってこともあつて俺がその薬をとりに行く役に選ばれたんだ。

今のところその病気で死んだ奴はいなかったから、いつまでとかないけど急がないと多くの村人が死ぬかもしれないんだ。

……よし！ロア！これでわかっただろ？俺は急いでいるんだ。だから早く行かせてくれ！…な？」

長々と話したせいで口の中が乾いていた。俺はそばにあつた水を口に含んだ。ゆっくりと冷たい水が喉を通っていくのがわかる。…少しの間だが、安心した。

俺が水を飲んでいる間、ロアは顎に手をあてて俯き、何やら真剣な

表情をしていた。それを見て俺は、次にはっせられるロアの言葉が、俺を解放する…というものであることを心から願った。

「…君、親…っていうか親戚でもいいけど、いるの？」ロアは顔をあげるとすぐに聞いてきた。

なんでいきなりその質問？と思ったけれど正直そこは聞かれたくないことだった。しかし、ここで答えなければ事態は悪化しそうだ。それに、ウソをついてもきつとばれる。

「いないけど。…」それが？と言う間にロアが強引に口を挟んだ。

「じゃあ。君は村の人たちに半強制的に今回の役を引き受けさせられたんでしょ？……村を追い出された、に近いようなやり方で。」  
「っ！！」俺の話のどこからそんなところまでよみとれるんだ？

…また追い詰められている。気がする。俺は狭い空間の中にいて、ただでさえ窮屈なのにロアはどんどん俺を端の方に追いやって、しまいには…俺は。

「そして、その怪我。今の君の話に出てこなかったけど。」

ドキリとした。俺が最も触れて欲しくなかったところだ。きっとロアはもうわかってるんだ。

「僕の考えを話していいかな？」ロアの問い掛けに、俺は答えなかった。ロアはそれを肯定としてとらえたようだ。勝手に話し始めた。

「君は両親がいない…つまり孤児だね。仕方なく村のどこかの家に

引き取られた。…君の性格だと、家や村の人には可愛がられていたんだろうね。

でも、村では病気がはやった。そのせい…かな？村人がいきなり君にきつくあたり始めた。

君はそんな仕打ちをうけても自分を可愛がってくれていた村人のことが好きだった。……でもさすがの君も薬をとってくるというのは抵抗があつた。

まあ当たり前のことだよな。だから村人にはそう伝えた。……そして、突然暴力をふるわれたんでしょ？一通りやり終えると村人は旅の道具だけ渡して、君を村から追い出した。

……つてところかな？どう？あつてたかな？」

あつてる、あつてないなんていうレベルじゃない。そのまんまだ。まるで全部見ていたかのようにだった。……というか見てたのか？…コイツならありえる。

また返答しないでいるとロアは満足そうに微笑んだ。

「そんな人たちのところに戻る必要はないよ。」

## 第4話

「ここに僕と一緒にいればいいんだよ。…一生。」

ロアは本気で言っていた。笑いながらの言葉でも、ナイフを押しつけられているような威圧感があつた。

「い…いやだ！俺は…帰るんだから！…薬を持って、あの村に戻るんだ！」

あの村には俺の育ての親がいる。可愛がってくれていた近所の人がある。友達もいるし先生もいる。

いくら暴力をふるわれたからって、それは変わらない。あの村に戻りたい。これは偽りなんかじゃないんだ。

「君がわかってくれるまで何回でも言うけど、君は村までたどりつけないよ。」

途中で死んでしまう。」

俺がここにのこると言わないからか、（たぶんそうだ）さすがのロアもだんだんとイライラしてきたようだ。

「…戻ったって、誰も君を歓迎しないんじゃないかな？追い出されただよ？…ケガをしながらだし、途中で死ぬ確率の方が高かったんだから……村の人たちは君が死んでも何とも思わないよ。」

「お前に！……何がわかるんだよ！？」別にロアを殴ってやろうとか、そんなことを考えたわけではなくて……気付いたらそうしていた。自分をコントロールできない。

「さっきからベラベラと！……お前は知ってるように思っても、何にもわかつちやいないよ！」

わかってたまるか！俺がただけあの村好きかも……ただけあの人たち好きかも……ただけ村に戻りたいかも……お前は何かもわかってないんだ！

わかったように言うなよ！お前にはわからないはずだろ？あの人たちにだって理由があったんだよ！？」

完全に抑えがきかない。本当は、ロアがあつてゐるってわかつてるんだ。ずっとわかつてた。……酸性雨の中を歩いてるときにはそのことしか考えられなかった。

それでも……抑えずにはいられなかった。……俺はどこかで、それでも……思っていたんだ。信じていたい自分がいた。

くそっ！なんでこんなことになるんだよ！……俺は目を力強くこすった。そうしなければ、涙があふれてしまうからだ。あわてて俺はロアに背を向けた。



俺におもいきり殴られたロアはしばらくだまって座っていた。俺に殴られて床に倒れこんだ状態から体を起こしただけの格好だ。

…やりすぎたかも。俺がロアに謝ろうか…と迷いはじめたときやつとロアが口を開いた。

「ねえ。ちよつとこつち見てよ。」まったく怒っているという感じはなかった。だから俺は安心しきっていた。とりあえず謝るか…俺も悪かった。

振り向くか振り向かないか。というよりも、ロアが俺の頬を殴れるようになった瞬間だ。俺の頬に勢い良くロアのこぶしがぶちあたった。

油断しきっていたこともあって、俺はロアよりも遠くに吹っ飛んだ。…その結果、本でできたタワーにぶつかってしまった。

その衝撃で本の雪崩がおきて、俺はたちまち本に埋もれてしまった。殴られたのも痛かったが、この本もかなり痛かった。

俺は両手で必死に本をどかした。どうやらロアは手伝ってくれていないらしく、そのおかげで俺は、思っていたより長い間本に埋もれていなければならなかった。



## 第5話

「僕が何にもわかっていないって?……バカ言うなよ。僕の方がわかるくらいさ。」

やっと本をどかして立ち上がろうとしたときにロアが言った。

立ちながら

「どういうことだよ。」と聞いた。

「……どうして僕がここまで君に執着してるかわかる?」

突然のことに俺は一瞬言葉を失った。そうだ。こいつのこれまでの態度はわからないことばかりだ。偶然出会った俺をどうしてここまで

「わからないようだから教えてあげるよ。全部。…聞いたら君はショックを受けるかもしれないけどね。」

試すような口調にイラッとした。

「なんだよ。」

「さっき僕は君は村から追い出されたって言ったでしょ?それはうそじゃないよ。……どうしてそれを僕が知っているかだ。」

君が僕に会ったのは偶然ではなくて必然なんだよ。  
どういうことだかわかる？」

バカにされている気しかしなが、俺は今お前が言いたいことわかるぞ。

「仕組みれてたってことなのか？」

「…よくできました。じゃあその首謀者は誰だと思う？」

いちいちむかつかない。

「お前じゃねえの？」これまでも態度からするに絶対にこいつだ！

ロアはニコリと笑った。

「残念。僕じゃないんだ。言っただろう？村の人たちは君を追い出したかったんだよ。」

「村の奴がお前に頼んだっていうのかよ！？」  
いくら俺を追い出したくなかったからって…そんなことまですんのかよ？

「正解。村の人はどうしても君を追い出したかったんだ。多大なお金を注ぎ込んで僕に連絡をよこしたよ。

僕はちよつとだけど、有名だからね。君と歳も近いし。」

自分がそんなに村のみんなに嫌われているとは。今回のことはみんなを信じていたのに……。泣きたくないのに涙が溢れてくる。泣きたくないと思うほどにたくさん溢れる。

「なんだよ。…そこまで、して。…俺を追いつたのかよ。」

「…君の悪いくせだ。」ロアは軽くため息を吐きながら言った。

「まだ僕はなんで村の人が君を追いつたか、言っていないだろう?。」

「俺を邪魔だと思ったからだろう?。」自分で言いつてさらに悲しくなった。

「早とちりだね。…さきに言っておくけど、村の人はみんな君のことが大好きなんだよ。」

ロアのその言葉で俺はよくわからなくなった。

そんな俺をみて、ロアは2人分のココアを用意しながら呟いた。

「君は幸せ者だよ。僕なんかよりもずっとね。」

## 第6話

ロアが何を言いたいのか全然わからない。…というよりもわからせようと思ってるのか？まわりくどい説明ばかりで、俺の頭の中はパニック状態だ。

「…どういうことだよ。」続きを話そうとしないロアに早く話すように促す。

「確かに村人たちは君を追いつけたかったんだ。…それは、君が本当に村のことも村人のことも好きだって知っていたからだ。」

…本当は村人たちは君を助けたかったんだ。  
君の村でまだ病気にかかっていなくて、若い年だったのは君くらいしかいなかったんだよね？」

俺は余計にパニックに陥っていた。今度はロアが休むことなく、話を進めたからだ。

「そうなんだよね？」

もう一度聞かれて、俺はようやく答えられた。確かに俺くらい若くて病気にかかっていなかったのはたぶん俺だけだった。ほかにいたかもしれないが、俺が一番健康だっただろう。

「そこなんだ。村人が君を追いつけた理由は。  
君はまだ病気にかかっていなかったし、なによりも若かった。」

そんな君もあのまま村にいれば絶対に病気がうつっただろうね。…  
それを村人たちはふせぎたかったんだ。

まだ長い人生がのこっていて、村のみんなを大好きな君に生きていてほしかったんだ。……君がみんなを好きなように、みんなも君がすきだったんだね。

でもただ村を追っ出すだけでは死ぬ確立の方が断然高い。だから僕に頼み込んできたんだ。君の面倒をみてくれてね。

あとは運まかせのトコもあったね。君が一人でここまでこれなければ、すべては台無しになっていたんだからね。」

ロアは一気に…しかもさらっと説明をした。

俺にとってはそうだったんだあ！よかった。嫌われてたんじゃないんだあ！……なんてさらっと受け入れられるような内容じゃなかったんだけど。

だから俺は、ロアから話されて、自分で十分その話を整理して…初めてロアが話してくれた内容が理解できた。

「つまり、みんなは俺のことが好きだから、俺を生かすために村を追っ出したってこと？」

俺は自分で整理して導きだしたこと…というよりも簡単にわかることか…をあっているか確認した。

「そういうことだね。」

ロアがさっき入れたココアを飲みながら、適当な雰囲気のを少しばかり漂わせて答える。

「じゃあ、俺が薬を頼まれたのも……暴力ふるわれたのも、うそで演技だったってこと？」

整理しながら疑問に思ったことを口にする。

「そういうことになるね。……ああ、いい忘れたけどその病気を治す薬……そんなの存在しないんだ。」

でも勘違いはしないでね。村人たちのほとんどが病気にかかっているのはうそじゃないからね。」

ロアは俺が考えることなんてお見通しだったようだ。俺はがっかりして深いため息をついた。

別に俺はあの村で死んでもよかった……むしろあの村で死にたかった。だから俺は自分が生きていられることよりもみんなと一緒にいられることの方がよっぽど幸せだった。

薬の話がうそだとわかった今、俺はみんなを救うこともできなくなってしまうんだ。



## 第7話

「がっかりすることなんて何もないよ。君はここで病気になることもなく、不自由なく暮らせるんだから。」ロアが言う。今までで一番楽しそうに…。

俺はその言葉をつけ、よくよく考えた。もちろんこの先のことについてだ。

そうしてひとつの結論に達した。きっとロアの話聞いてから、俺の願いはひとつしかなかったんだ。

「…ロア。俺は、それでもあの村に帰りたい。行かせてくれよ。…あの村で死ぬのは、俺にとっては本望だ。」

きつと声は震えていた。ロアが今までに散々断ってきたことだし、そう簡単にはいかないだろう。

ロアはココアが入っているカップをテーブルに置いて、俺に一步步近づいた。

やばい！さっき殴られたこともあり、俺はとっさに腕で顔をガードして目をギョツと閉じていた。

……しばらくしても何の衝撃もこない。俺がガードを解いた瞬間を狙っているのだろうか…。

目を開けてロアを見る。その頬はたえまなく溢れる涙でぬれていた。

俺は突然のことで状況がうまく飲み込めなかった。  
なんでこのタイミングでロアが泣くんだ！？

「……村に戻って、どうすんだよ！戻ったら君のために辛い選択をした……村人たちが可哀想だと思わないのかよ！」

この家に来て、まだほんの少した。…ロアがここまで怒って声を荒げることなんて今まで一度もなかった。

「村人たちのことも考えろよ！……君に生きていてほしいんだ。もし村に帰るなら、それはかなわないんだよ。」

またいつものロアに戻りつつあった。…ロアがここまで必死になるなんて。

そうか。ロアは俺よりも村人たちの気持ちがわかっているんだ。俺のことを頼まれた張本人なんだから。

ロアのこと。俺はもつといやなやつだと思ってた。俺をこの家に閉じ込めて、出してくれなかったからだ。……どこか怖いところがあったからだ。

俺はロアのことを誤解していたんだ！ロアは俺のために、みんなの

ために涙を流してくれている。とてもいいやつじゃないか。

そういえば、俺はロアのことをあんまり知ろうとは思わなかった。全然知らないんだ。

ロアが言ったことは正論だ。確かに、今村に帰ったらみんな悲しむだろう。怒るかもしれない。俺はみんなに愛されていた。……それだけで幸せだ。

俺はようやく落ち着きを取り戻したロアのそばまで行って、肩に触れた。

「わかった。……俺。ここに残るよ。……よろしくな。」

## エピソード

しばらくして、彼は眠った。泣き疲れたようだ。寝たことをしっかり確認する。本当に幸せそうに寝ていた。

僕は、村で唯一電話をかけられるところへいった。公衆電話のようなものだ。

そこから、エルタ村に電話をかける。エルタ村にも、一ヶ所だけ公衆電話のようなものがあるのだ。

呼び出し音が数回なつてから、エルタ村の村長が電話に出た。僕からの電話を待っていたのかもしれない。

「ロアです。」と言うと、村長は黙り込んだ。

僕は通話料が高いので、手っ取り早く終わらせるために、簡潔に話をする。

「彼：僕のところに残るそうです。：よかったですよ。意地でも村に帰りそうだったんで。」

これで契約は完了ですね。明日には薬が届くと思います。

……彼には、あなたたちが彼を救うために村を追い出したと言っておきました。その方がいろいろと都合がよかったんでね。

彼は、あなたたちに愛されているとわかって……とても幸せそうですし

たよ。

涙を流して喜んでました。本当にあなたたちのことが大好きだったんでしょう。

まさか、自分が病気が治る薬と引き替えに僕に売られたなんて。…夢にも思わないでしょうね。

まあ…幸せですよ。結果的には、自分を犠牲にしてあなたたちを救ったことになるんですから。

彼にとってはこれ以上ないほど幸せで………きっと本望ですよ。

それから最後にもうひとつ。………安心していいですよ。彼が村に帰ることもなければ、あなたたちが生きていると知ることもないんですから。

彼はあなたたちにうられたんですから。僕がしっかり面倒をみますよ。…あなたたちの分も。

…彼は死ぬまでずっと………僕と一緒にです。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2520b/>

---

BACK

2010年10月27日01時35分発行